

た取り組み)の支援のためのガイドを公開した*3。これはWHO欧州地域事務局による夜間の騒音ガイドライン(次項)など、最新の情報を含んだものである。またEEAは騒音の監視と情報提供に関するデータベースシステムを更新・向上させた*4。これは2010年6月までのEEA加盟国のデータを含み、ウェブサイトを通じて使い勝手のよいマップビューアにより閲覧することができる。

世界保健機構(WHO)の取り組み

WHO欧州地域事務局は2009年に欧州における夜間の環境騒音に関するガイドラインを発表した*5。これは睡眠妨害をはじめとする夜間の騒音の影響を総括し、具体的な推奨値を提示するものである。また2011年には欧州における環境騒音による疾病負荷に関する報告書が提示された*6。

関連URL

*1 <http://ec.europa.eu/environment/noise/home.htm>

*2 <http://www.ennah.eu/>

*3 <http://www.eea.europa.eu/publications/good-practice-guide-on-noise>

*4 <http://noise.eionet.europa.eu/>

*5 http://www.euro.who.int/_data/assets/pdf_file/0017/43316/E92845.pdf

*6 <http://www.euro.who.int/en/what-we-publish/abstracts/burden-of-disease-from-environmental-noise-quantification-of-healthy-life-years-lost-in-europe>

熊本大学 川井敬二・抄

建築歴史・意匠

UDC : 712.3

ボマルツォ：聖なる森

[a cura di Sabine Frommel : *Bomarzo: il Sacro Bosco*, Electa, 2009, p.350]

・抄録者注

本書は、イタリアのヴィテルヴォ近郊のボマルツォに所在する庭園「聖なる森(Sacro Bosco)」に関する研究書である。

「聖なる森」は、ヴィチーノ・オルシーニ(1523-1585)により作られた庭園で、長い間忘れられ荒廃したままになっていたのが、1940年代によく一般にも知られるようになった。敷地内には数多くの奇怪な彫像が配置されていることから、別名「怪物の森」とも呼ばれ、日本では澁澤龍彦によって紹介されたこともある。ただ、マニエリスムの庭園としてはすでに一定の知名度を得ているものの、庭園内に建てられた小建築については、いまだにオリジナルの図面も発見されていないこともあって、これまで研究の対象とするには困難があった。かといって、奇怪な彫像にしても、史料がすくないことから、いまなお多くのことが謎のままであることにはかわりはない。

それでは、オルシーニがいかなる考えを持ってこの庭園を作ったのかということだが、彫像については、すでにギリシア神話、オヴィディウス、ダンテ、あるいは『ポリフィルス夢』といったさまざまな文学からの影響の可能性が指摘されており、実際、オルシーニは文学に親しんだ人物だったことが知られている。文学以外にも、彼の交友関係からさまざまな影響があったという可能性はあるだろう。妻のジュリア・ファルネーゼもまた交際範囲が広がったことから、オルシーニ夫妻をとりまく文化サークルについても考察の余地がある。もちろん、そこにはなんらかの建築家が関わっていたはずだが、これまでの研究ですでに多くの名が挙げられてはいるものの、いずれも推論の域を出ていない。

以上のように、「聖なる森」の研究には、庭園史や建築史はもちろんのこと、文学史、社会史からの読解が必要となっており、逆に言えば、史料が限られていることも手伝って、それだけ広範囲の分野からのアプローチが可能になっているとも言える。実際、本書も350ページという大部におよび、23篇もの論考が収められている。もちろん、これらが今日までのさまざまな分野における研究成果の恩恵によるものであることは言うまでもない。たとえば、建築史に関して言えば、これまでの研究の過程で、同時代の建築家の活動もだいたい明らかになってきており、それによって「聖なる森」のようなものも、こうして研究対象とすることが可能になっているのである。

本稿では、ヴィニョーラとピッコ・リゴリオという二人の建築家との関係に着目する一篇をとりあげる。著者は近年にヴィニョーラのモノグ

ラフ(Marcello Fagiolo : *Vignola, l'architettura dei principi*, Gangemi Editore, 2007, p.335)を出版したばかりで、そこでも「聖なる森」を近郊のヴィラ・ランテなどの庭園との関係から論じていたが、本論では「聖なる森」の小建築について、ヴィニョーラとリゴリオとの関連性を中心として考察している。たとえば、「傾いた家」からはヴィニョーラの意匠が読み取れると言い、また、配置計画の軸線の分析からはヴィラ・アドリアーナとの類似性が見られ、そこから当時その発掘に関わっていたリゴリオの影が浮かび上がる。このように、同時代の建築や建築家の活動と照らし合わせ、それと同時に、多くの文学作品や絵画史料にも考慮しつつ、小建築にこめられた意味を読み解こうとし、最終的にはオルシーニがこの庭園を作った意図についてまで考察を広げている。

なお、本書の巻末にもオルシーニと交友関係のあった文人アンニバル・カーロとの間で交わされた書簡が所収されているが、2009年には「聖なる森」に関連する史料が解題とともに編纂された出版物が刊行された(a cura di Sabine Frommel : *Bomarzo: il Sacro Bosco, Fortuna critica e documenti*, GB EditoriA, Roma, 2009, p.133)。また、関連書として、「聖なる森」を含むマニエリスム期の建築に見られるさまざまなシンボルに関しては、Carlo Cresti : *Simboli, mostri e metafore nelle architetture del Manierismo*, Angelo Pontecorboli Editore, Firenze, 2010, p.101も出版されている。

・抄録

マルチェッロ・ファジオーロ：ボマルツォとヴィニョーラおよびリゴリオの理念

Marcello Fagiolo : *Bomarzo e le idee di Vignola e di Ligorio*, [Bomarzo: il Sacro Bosco, Electa, 2009, pp. 66-75]

近年の研究において「聖なる森」については、明らかになるどころかさらに複雑さを増している。その理由は、建築家や芸術家からの影響関係が非常に複雑であることと、それにもかかわらず史料が沈黙しているためだ。当時この地域で活動していたヴィニョーラやピッコ・リゴリオとヴィチーノ・オルシーニとの関連性については、すでに幾度も仮説が立てられているが、直接的な関係を証拠付ける史料が欠けているため、あくまでも間接的な兆候から考察しなければならない。本論では、両者からどのような影響関係がありえたのかについて考察する。

「聖なる森」の中に点在する建築のうち、1550年から52年に計画されたと考えられる「愛の劇場」では、正面の階段にも広場にアクセスする斜路にも、プラマンテのベルヴェデーレの中庭との類似が見られる。「聖なる森」においてミケランジェロからの忠告の可能性は検討の余地があるが、少なくともこの「愛の劇場」に関しては考えにくい。なぜなら、ベルヴェデーレのプラマンテの階段は1550年にはすでに取り壊されていたので、ミケランジェロによる助言ではなく、むしろ、同じくベルヴェデーレに携わったヴィニョーラからの影響の方が可能性がある。また、敷地内で「愛の劇場」と「競馬場」の軸線が交差するさまは、ティボリのヴィラ・アドリアーナにおける軸線の構成に類似しており、当時その発掘現場を指揮していたリゴリオからの助言があった可能性が考えられる。

「傾いた家」はおそらく1561年よりあとのものだが、橋によって建築を庭園に接続させるというアプローチは、カブラローラのパラッツォ・ファルネーゼを連想させ、またトスカナオーダーが6モドゥルスの柱身を持つことから、ヴィニョーラの意匠との関連性が見られる。

「神殿」は1561年から65年ごろの建築と考えられるが、前面の列柱にみられるセルリアーナは、当時、セルリアーナを持つ神殿の図を描いていたリゴリオによる示唆が考えられる。一方で、ファサードの基壇前面にはヴィニョーラにつながる装飾も見られる。

また、「神殿」の配置を見てみると、およそ東西に向いている軸線は、一見すると古典的あるいはキリスト教の伝統に従っているようだが、より正確には北西から南東への向きに振れており、その軸線を延長すると、ロードス島を貫き、エルサレムの方角に向いていることがわかる。つまり、オルシーニは庭園全体を、ダンテが描いたような怪物の迷路が連続する「森」に見立て、この「神殿」を救いの道を示す灯台のような存在として位置付けたのではないだろうか。

横浜国立大学 菅野裕子・抄